

世界の珍竹

室井 緯

竹と笹の種類が世界に1250種もある、これらのうち、稈が円で、葉が長楕円形である竹や笹の仲間から特に桁外れのものを持つてみると次のようなものがある。

なお、日本の珍竹については、拙著「竹と笹」中の次の二項を御覧願いたい。すなわち

珍らしい型をした竹と笹、107ページ

カビのためにできた美しい斑竹、281ページである。

高山に生える竹や笹

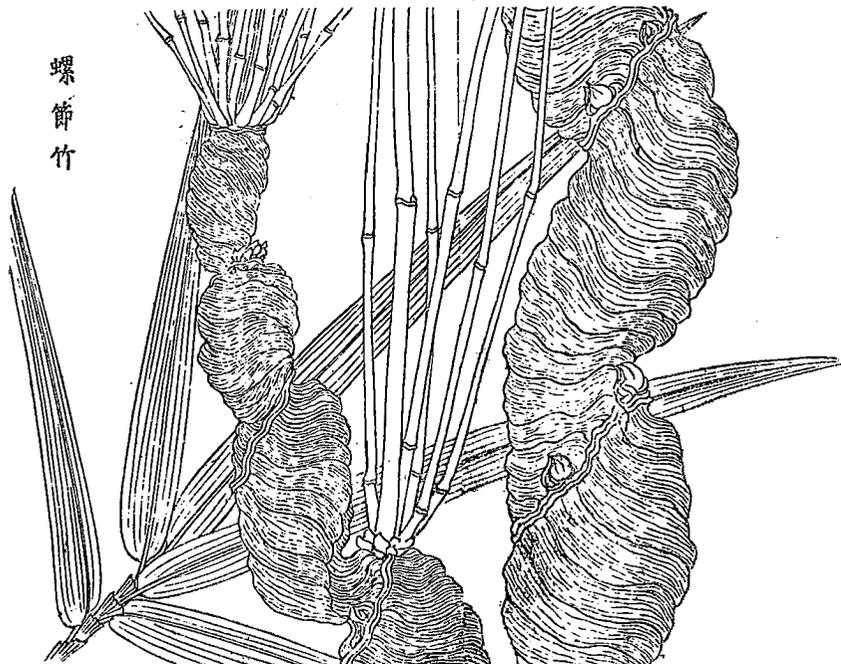
世界最高の山地に生ずる竹は、①クスクエア アリスタータで、ペルーのアンデス山中の4500m.の高所に自生するものである。本属はアメリカ大陸特産で、大灌木、小灌木、または攀縁茎をして、花が密集した円錐花序を頂生する特殊なもので、約60種を含む。特にアンデス山の高部地帯、及びブラジルの高原地帯に分布し、メキシコから南チリーまで生えている。南限は南チリーの西岸のチロエ島(南緯42度)で、本属の南限であるばかりでなく、世界のあらゆる竹や笹の生育の最南端でもある。

日本の竹や笹はどういう関係か、十分に寒さに耐える素質を持ちながら、どうも遠慮がちで、高さにおいては前者のそばにもよれない。我が国の最高所に自生するものはチシマササ、一名ネマガリダケで、北海道、本州に広く分布しながら、最高の場所は中部のアルプスの2200~2300m.辺りである。ここでは稈が1~1.5m.に伸長して茂っている。また、中国山脈の氷ノ山は標高1510mで1000m.位のと

ころからヤネフキサササに代って生え初め、1200~1300m.で最高の生長を示し頂上付近では稈高1.5m.位である。しかし、東北の岩手県早池峰山^{はやちねさん}では1914m.の殆んで頂上までチシマササが分布する。この高所でみられるチシマササは丈は僅かに10~15cm.内外で、サハリンや千島の海岸で見られるような矮型である。頂上より下るに従って順次、稈は伸長する。中腹ではコマツガ、ダケカンバ、トガ、トウヒなどの群落を処々で破ってチシマササが時々群落をつくる。また、東北地方の山々では700~800m.から1300m.の場所に最良の生育がみられる。

この早池峰山などの高所や、千島、サハリンなどに生じる矮型のもと、中部地方の最高所の1.5m.の稈高とを比べると中部地方では本種が大型のまま、山腹で分布が止っている理由がわからない。中部地方の高山で、この丈高いチシマササ群落を眺めるとき、本種がどうも遠慮がちで十分実力を発揮せず、寒さに挑戦してゆかぬのが不思議でならない。本種がもし、中部地方で、早池峰山におけるように10~15cm位になるまで、寒さと戦いつつ山頂に向って繁殖し続けることができたと仮定したら、更にもう500m.や1000m.ぐらい高い所までは軽く実力が発揮できて生存が許さ

螺節竹



ラセチック *Arundinaria Simoni* var. *monstrosa* Ohnuma (日本竹譜より)

れそうな気がする。

よく営林署などの人に会うと「ネマガリダケは頑固で、この群落のある山では植林が全然できず、駄目である。…」などと言ったり、また書いてあるが事実はこちらに反し、中部地方のネマガリダケはおとなし過ぎて、高山植物などの縄張りを断ちきれず苦しんでいるような気がしてならない。

巨大な竹

現代世界中で知られた最大の竹は^②デンドロカラムス ギガンテウスである。本種は、仏印、マレー、タイ、ビルマの原産で広く栽培されている。稈の高さ36m、直径25cmもある。この類は地下茎がなく叢生するので、この巨大な竹が1株に300本から400本が直径30mを描いて一大群叢をつくる。材の肉は厚く、強いので建築材に用いたり、内部を割いてバケツなどを作っている。また、本種に次いで大きいものはインドの^③パンプサ アルンジナケア及び^④パンプサ ツルダとか、マレー、東インド辺りの^⑤ギガントクロアロプスタなども太く、ともに建築材などとして顕著なので広く栽培される。これらの竹はいずれも、直径24~25cm、周囲70~80cm、というのが最も太いものである。また、稈の高く伸びて有名なのはインド、マレー、タイ地方の^⑥デンドロカラムス ブランジシであって、40mになる。本種も広く栽培され、材は建築用にされ、また、割裂性が強く、細く割いて竹箆などを作り、また筍を食用にする。

上のはかにもデンドロカラムス、ギガントクロア、パンプサなどの属のなかには種々の大きいものが知られている。

日本の最大の竹はモウソウチクで、九州あたりのもには可成り太いものがあるが、記録に残る最も太いものは三重県北牟婁郡尾鷲町のものであろう。この尾鷲は竹の町で、汽車で尾鷲に入るあたり藪が処々に見られる。うちでも土井八郎兵衛氏所有のものが最も太く、明治この方、博覧会や共進会などに出品して度々受賞し、天覧の光栄にまで浴したものである。同氏の祖先は200年も前に、鹿兒島から苗を取り寄せ、暖かい紀州で筍栽培をすすめた恩人なのである。このモウソウチク材は高さ25m、周囲60cmで巨大な点では日本じゅうのどこのもよりも立派である。次いで、鹿兒島県、宮崎県のものが大きい。

このモウソウチクというのは日本の中南部の気候が最もよく適するのであろう。栽培の北限は北海道の函館市の西方、松前町、続いて青森県の北津軽郡七和村や西津軽郡深浦方面である。この辺では冬には藪巻きをしてやるとか、蓆で包むとか特別の保護が必要であ

る。ところが経済栽培の限界はずっと南の宮城県あたりである。では南に寄るとより生育がよいかと思えるが、常識を裏切って、南限は琉球で止ってしまう。琉球列島では曇りのためか傷みつけられて貧弱な指大のものになって辛うじて命を繋いでいるのに過ぎない。台湾では平地の生育は困難で標高700~800mから1000m辺で、やっとモウソウチクらしい生育をする。

なお、よく太いモウソウチクなどの話をすると、南方の台湾に行くと巨大なものがあるとか、九州のどこかでは切断して鹽か、飯糰を作るなどと、熱帯のみやげ話が出て、決して太き自慢の話に落ちる。飯糰ほどのものを見たなどと言うのは自然のものを見たのではなく、加工品をちょっと見たのである。すなわち、竹箆を豚脂で煮て軟くして、一端を割って伸し、2、3個接ぎ合わせたものである。それ故、世界じゅうで一番太い竹というのは、日本のモウソウチクを一廻り太くしたものだと思えば間違いないのである。

細小の竹と笹

巨大な竹に続いて最小型のもを紹介することにしてしよう。小型なことでは凡そ日本の生物というものは日本の狭い土地に適応して総て小型で、この小さいという特徴では世界に比を見ないのである。

先ず世界最小の竹は何と言ってもオカメササである。この竹には、ゴマイササ、イツハシノ、ブンゴササ、カグラササなど異名が随分ついているが、〇〇ダケと言うような一人前に認められた名というものは一つも見当たらないのはちょっと可愛想な気がする。そして余りにも馬鹿にされすぎた気がする。本種は日本の特産植物であるが、中国には同属の植物が2種あって、大きさは大同小異で、中国の大陸にこんな小さい竹が生育していることは、何としても不思議なことである。それにこのうちの1種は日本のものよりも更に一まわり小さいには驚きに値する。いくら変化性に富んだ生物の仲間とは言え、あまりにも例外すぎることである。

笹の類での横網格は何と言ってもオロシマチクで、他の種類ではいくら小型といってもこれには到底及ばないものである。よく鉢植などにしてあって、2cmあるかないかの小さい葉が左右2列に10枚内外がきちんと並んで4~5cmの稈の先端に行儀よくついているのは、何としても可愛らしいものである。本種と大同小異のもので葉裏に毛のあるケオロシマというのがあるが殆んど同じ位の大きさである。このケオロシマはケネザサの矮性型の一型であるとされている。

奈良の春日公園を歩くとケネザサの極小型の貧栄養

型のものに出会うが、よくこの大きさを野生の植物と混じて生育ができるものであると驚かされる。この植物相を見ると屋久島の植生にちょっと似かよったところがある。スギ、シイ類、カゴカシ、フジ、ナギ、アラカシ、イチイガシなどは驚く程大木となるが、その下草には二型あって一つは藁箆型で、チヂミササ、タデ類、ヒメバライチゴ、ヒメアギスミレ、アキノタムラソウ、ヒメキンミズヒキなどは頗る小型となる。他の一型は普通の大きさに成長するもので、マツカゼソウ、ナガバヤブマオ、オドリコソウ、シゲシダ、ワラビなどがそれである。原因はシカの食害とか、大勢の人々が踏みつけるとか、固い粘土質に育ったためであるとか言われるが、他に何かもっと大きい原因がありそうな気がしてならない。

なお、奈良公園を広く歩いてこの笹を観察してゆくと公園から裏山の方へ進むにつれて次第に大型となり、三笠山の裏側などに行くともう普通のケネザサとなってしまう。

しかし、このオロシマチクやケオロシマを植木鉢から地に移して肥料を施すと短かい葉は曲って一層奇麗を呈し、決してネザサやケネザサにはならないのである。また、ネザサ、ケネザサを盆栽して度々刈り取っていくら營養養型の小型に作ってもオロシマチクやケオロシマにはならない。やはりその間に遺伝的なものを持っているとみえる。

それ故「日本の竹や笹が細分されすぎているから、観察や栽培によって再検討して整理し、数を減らせ。」などとよく注意を受ける。もちろん、多くの竹笹の名のなかには「無駄な名称」(竹と笹、205ページをみよ。)などでべたようにすぐにも整理のできる、またしなければならぬものも多いが、また反面、多くのものにはよく調べると夫々の特徴が見付かり、そうした特徴を余り多く知りすぎているためか、そう簡単に急いで整理を断行する英断を持たないし、またその必要もないから、そう短刀直入にできないものも多いのである。

続いて日本を除いた地域の最小の笹は⑦ニイタカメダケである。この笹は台湾の中央山脈の阿里山の高嶺から、新高山へかけて海拔2000~3000m.の処に自生する高さ10~20cm.ぐらいのもので、ちょうど日本のヒメシマダケか、日陰のアズマネザサを思わせる姿である。本種は特殊のもので、地中に繊細な匍匐茎を持っていて節々には根も芽もなく、その先端が扛起して竹稈となる。この匍匐茎のあることは他の竹笹の仲間では見ない特徴で、日本の地下茎のある仲間と、南方の叢生するグループの中間型である。本種はとても日本のオロシマチクなどの比ではないが日本外のものとし

ては最も小さいものである。

節間の長い竹

竹の太さ、長さは日本のものと日本を除いた他の地域のものとを比べると大した差がないことを述べておいたが、節間の長さと言うと比較にならぬ桁外れで日本の3倍もある。

日本産のものは高さ太さの比は正比例とは言えないが総じて均質がとれているが南方などの節間長の著しいものというのは太さに反比例して細いものほど節間が長いものが多いのである。すなわち、同一の節間長のものを比べると日本のものより著しく細いことである。

節間の長さの著しい世界的のものは⑧レレバライで、マレー、仏印に産し、節間の最も長いので知られ、2m.に余るものがある。最も長い部分は地上から第3、第4節目のところである。また、この稈は黄色で頗る美しいので水管にしたり、傘の柄にしたりしている。ついでヒリッピン産の⑨リマツルダケで節間が1m.に余るものである。また、インド、仏印などに広く栽培する⑩ネオホウゼアナズルローアで、本種の節間も約1m.である。この竹は全く例外で、稈も太く、肉が薄いので輪切りにして、深い水桶などを作って、太さと節間長をうまく利用している。また、続いて長いのは⑪ブルメイツルダケで、仏印、東インド、マレー、の森林中に産する蔓竹で、樹木をよじ登り、節間が90cm.余りに成長する。この竹は細いので、南方では笛とか、火吹竹として重要なものである。これらの外、節間が70~80cm.級のものはザラに知られている。

日本の竹の王者は何と言ってもビゼンナリヒラ(誤称トウチク)である。直径4~5cm.で高さ10m.余りにも伸びる。節間の長いものでは80cm.内外に伸び、特に九州、四国の暖地には巨大なものがある。庭の隅に植えて施肥すると稈が気持よく真直に伸び、緑したたるような葉をつける。このようによく出来たのに出会うと、何となく愉快になり、緑の複雑な美しさを見直すのが常である。

このビゼンナリヒラは関西の諸地方の庭に普通で、稈が直径2~3cm.高さ5m.に伸びた若竹を、3m.内外で先端を伐り払い、各節から最初に出た3本の太い枝を基部から4~5cm.のところを伐ると小枝が東生して、なかなかよいものである。特に関西の大阪、神戸、名古屋、岡山、広島各都市では、大名竹(ダイミョウチク)と呼んで大鉢に植え、店頭と並べてあるが、グリーンがよく生気呼んで美しいものである。

蔓性の竹

日本の竹は総て稈の質が固く、直立して成長するが熱帯圏のものは一般に稈が柔軟のことが多い。その極端なものは森林樹木をよじ登る蔓性のものである。日本の竹より水湿の地に好んで生える。竹は殆んど世界じゅうに産するが、釣竿にするような固い竹は日本のものが最も優れているので、世界の市場に日本品が出廻っている現状である。

この蔓性の竹の仲間にはツルダケ（ヒイランテク）属、メロカンナ属など9属、約200種を含み、南北アメリカから南洋諸島、中国南部、インド、マダガスカル島、マライ群島、ニューギニアなどの地域にわたって広く分布している。

右のうち、^⑭ツルダケは台湾、ヒリッピン^⑮の森林地帯に亘って広く分布し、太さは日本のヤダケかメダケ位の太さであるが、稈が著しく長く、30m. から35m. にも伸びて、その長い節間に清水を貯めていることで有名である。特に熱帯地方では水が早く腐り、伝染病の媒介が烈しいために生水を飲むことが恐れられているから、この節間の水は熱帯地方の山地で働く人々の飲料水として特に貴ばれている。樵夫は山中で、この竹を見付けると幾本かの蔓を切って水筒代りに背負い、必要に応じて節の上部を切って、飲みますのである。このように節間に水を貯えているものは本種のほか、^⑯メロカラムス コンパクテフロルス、その他、数種が知られており、仏印、インド、ビルマ、ニューギニアなどに分布する。いずれの地方でも総べて樵夫などの飲料として貴ばれている。

竹に恵まれた日本ではあるが不幸にも上のような水を貯めるものも、蔓竹もなく、面倒臭い水筒を下げて登山しなくてはならないのである。

毎年開花する竹

竹や笹は樹木の一つで、花は毎年咲くことが当然であると思えるが咲かないことが普通である。それに比べてイネ科植物というのは殆んど例外なく毎年咲くもので、時にダンテク、サトウキビやトキワススキのように2～3年かかって稈が成長し、花が咲くと珍らしがられる。タケ科のものと、イネ科のものは開花の性質が随分違っている。

日本の竹や笹は2、3年続き稈が代って開花するものはあるが、そう何年も続いて開花するというようなものは先ず見当らない。2、3年も続いて開花する性質のあるのは、ネザサ、ヤダケ、オカメササ、マダケ、ハチクなどである。それに比べて1年だけで開花枯死してしまう、いわゆる一斉開花をする種類はチマ

キザサ、スズダケ、ミヤコササなどで、割合に開花の時期が揃うようである。これに反してだらだらと何年もかかって次々と稈が代って開花する癖の強いものはカンテクで、十分成長しているところとか、大群落を作って植え込んでいるところでは必ずと言ってよいほど毎年、それも春から晩秋まで開花し結実するものである。それに他の竹類のように開花しても株全体が決して枯死せず、知らぬ顔をして青々と茂っているのである。

ところが、「処変れば品変る……。」の譬のようにインドの^⑰ヒマラヤダケはヒマラヤ山の標高230～350 m. の山中に群をなして自生し、毎年開花枯死するというイネ科に類した竹もある。

枝垂れの竹

シダレヤナギのように長い枝や葉の下垂する植物は人の心を落ち付かせるもので、洋の東西を問わず公園、学校、あるいは教会などの庭園に広く植えられている。この枝垂れ品は各種の植物の中に見出されている。勿論、竹の類でも見付かっている。

マレー地方の^⑱デンドロカラムス ベンズルスは枝葉が長く下垂し偉観を呈するので広く栽培される。東部ヒマラヤから仏印にかけて分布する、^⑲デンドロカラムス パテルラリスは稈の高さ10m. 節間が60～80 cm. もあって多くの枝を下垂して一大奇観である。

日本のものは、ハチクの変わりもので、サカサダケと言われ（「竹と笹」50ページを見よ）、新潟県の西方寺に親鸞上人が訪れ、地に挿した杖から逆に枝が成長したと伝わっている。このような奇態はあらゆる民族から貴重品扱いにされて直ぐ伝説を産む。日本では植物の奇形が見付かると、神仏の靈魂などと結びつけて、神社とか寺院で貰い受け、そのうちに信仰と結びつけて伝説が生れてくる。よく地方に出ると真面目に親鸞上人と結びつけて話をしてくれるのである。このように伝説と結びつけると言うことは決して良いことではないかも知れぬが、口碑とともに、生存競争に不利な劣った劣性の形質が、特別の保護を受けて残され現在に及んだことは何としても有難いことで、親鸞上人に感謝しなくてはならない。

草質の竹

日本の竹や笹は総て稈が木質化していることが、イネ科と異った一つの特徴であるが、ヒリッピン^⑳のシノクロア エルメリという竹やアフリカに産する^㉑グアデルラ ロンギホリアの近似品3種などが報告されている。いずれも草質の柔らかな稈を持っていて、高さ60cm. 内外という短いものばかりで、稈の先端に大

きい葉をつけることでよく知られている。ちょうど日本のササグサに似た植物である。

肉質の大きい果実をつける竹

東インドに産する^⑨メロカンナ バンプソイデスという竹は花後に出来る果実が竹類ちゅう、最大で、直径8~12cm.もあって、リングのような形をしていて、果皮が肉質である。土人はピーテルナットのように美味であると言い、好んで焼いて食用にする。また、ビルマの^⑩メロカラムス コンパクトフロルスも果実がリング大で、肉質の果皮をもち、前種と同様、食べられるのである。ところが、日本では竹よりも笹の種類がよく結実するが、総て小型で果皮が薄くて種子に癒着し、いわゆる顯果で、コムギ、オオムギ粒ぐらいの小粒ばかりである。(「竹と笹」289ページ竹笹の果実をみよ。)

タバシール(たけみそ)の出来る竹

日本の本草書に^⑫たけみそ、漢名、天竹黄のことがよく書いてある。この天竹黄は、^⑬南洋刺竹バンプサ アルンジナケアと^⑭メロカンナ バンプソイデスなどの4、5種の稗の中のみ出来るものである。日本にはバンプサ属やメロカンナ属の竹を産しないので、和産のたけみそはない。これらの竹類はインドシナ、ボルネオ、マレー、海南島などに産し、いずれも稗が叢生していて、竹稗ちゅうに多量の珣酸を含み、その節間中にときたま珣酸質の固形物が出来ることがある。これを天竹黄(タバシール)と言い、強壯剤や催春剤として古くより薬用として貴ばれてきた。本品は他のいかなる属の竹稗中にも知られていない。

なお、上のものの外に、結節が螺旋状にぐるぐる廻りながら伸長するラセツテク(メダケの変りもの)のような畸型が時たま現われるが、決して種類が一定していない。また竹の皮の表面の刺毛に激毒を含み、コーヒーの中に一匙を入れると死亡すると言われるものなどがあると言ったものがあるが、真疑のほどが疑わしいのでこの辺でペンを擱く。

註

- ① クスクエア アリスタタ
Chusquea aristata Munro
- ② デンドロカラムス ギガントテウス
Dendrocalamus giganteus Munro
- ③ バンプサ アルンジナケア
Bambusa arundinacea Willd.
- ④ バンプサ ツルダ *Bambusa Tulda* Roxb.
- ⑤ ギガントクロア ロブスタ
Gigantochloa robusta Kurz.
- ⑥ デンドロカラムス ブランジシー
Dendrocalamus Brandisii Kurz.
- ⑦ ニイタカメダケ
Indocalamus nitakayamensis Nakai
- ⑧ レレバ ライ *Leleba Wrayi* (Stapt.)
- ⑨ リマツルダケ *Schizostachyum lima* Merr.
- ⑩ ネオホウゼアナ ズルローア
Neohouzeana Dullooa A. Camus
- ⑪ ブルメツルダケ
Schizostachyum Blumei Nees
- ⑫ ツルダケ *Schizostachyum diffusum* Merr.
- ⑬ メロカラムス コンパクトフロルス
Melocalamus compactiflorus Benth. et Hook.
- ⑭ ヒマラヤダケ *Arundinaria falcata* Nees
- ⑮ デンドロカラムス ペンズルス
Dendrocalamus pendulus Lidl.
- ⑯ デンドロカラムス パテルラリス
Dendrocalamus patellaris Gamble
- ⑰ シノクロア エルメリ
Dinochloa Elmeri Gamble
- ⑱ グアデルラ ロンギホリア
Guadella longifolia Cammsin
- ⑲ メロカンナ バンプソイデス
Merocanna bambusoides Trin.
- ⑳ たけみそ、漢名・竹黄、天竹黄、竹膏、竹腦、竹糖、英名 Tabashir, Bamboo manna

新刊紹介

“竹 と 笹”

室 井 綽 著

先般、井上書店から、室井綽著「竹と笹」の本が刊行された。

本書は、氏の過去25年にわたる収集研究の中から書

き留められた、竹と笹に関する論説を集めたものである。

こういう専門書は、如何かすると固苦しくなりがち